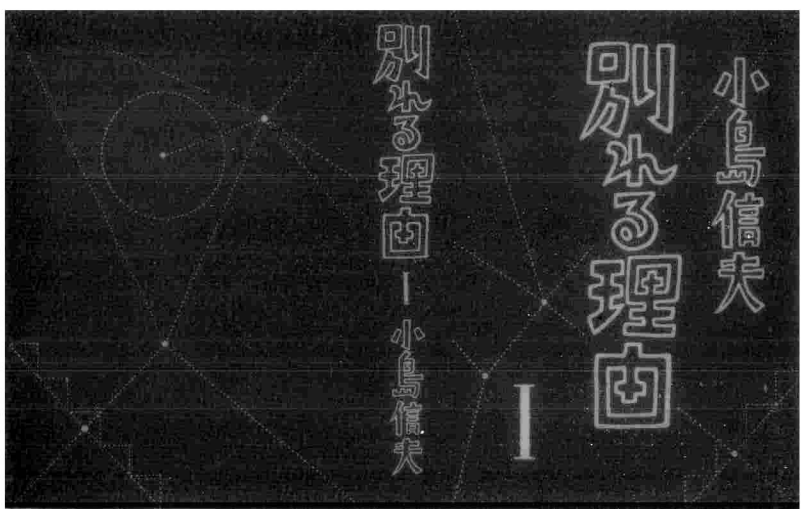
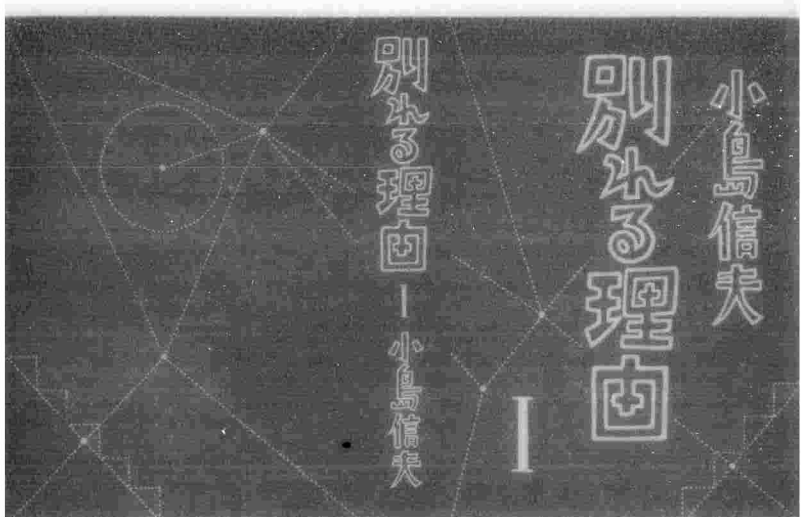




別れる理由 I

一九八二年七月二十日 第一刷発行

一九八二年八月二十日 第二刷発行

著者 小島信夫

装幀者 田村義也

発行者 三木 章

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―一二 郵便番号 一一二

電話東京(〇三)九四五―一一二(大代表) 振替東京八一三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

定価 二五〇〇円



落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えます。

© Nobuo Kojima 1982, Printed in Japan

ISBN4-06-200120-9 (0)

(文1)

別れる理由 I

彼は妻の友人である山上絹子と話をしている。

妻はにこにこ笑いながら、きいている。

絹子は妻の誕生日にプレゼントをもってやってきた。香水が入っているらしい。このごろ香水ばかりたまっちゃったわ、とあとで彼の妻はいうだろう。男の香水というものがあるだろう。ああいうものをつけてみるかな、と彼は笑うだろう。何しろ僕らの少年の頃は、(彼は「少年の頃」とこのごろよくいう。ときどき「われわれ老人は」と先取りしていうのとおなじ心境からきているのに違う)先生というものは、いいニオイがしたな。試験のときなんかも、ああいいニオイがするな、と思うと先生がうしろに立って、自分の答案を肩越しに見ているのだった。「名前を書いて。あとで書くつもりでいても、忘れることがある」といわれたものだ。試験といえ、あるとき、彼の担任の教師が、ニオイと共に彼の後に立った。「お前はカンニングしたといわれても仕方がないぞ。机の中に本が入ってい

る」教師は彼がカンニングをしているのを見ていたにちがいない。……

山上絹子はこういつていた。

「山上と二人で『アンナ・カレーニナ』の映画を見たんですのよ。すると途中で、私は帰りますよ、といって彼、立ちあがるのよ」

彼は黙ってうなずいた。どうしてまたそんなものを見に行っただろうか、と思ひながら。

「私はくせで、あの人に手をかけるでしょう。ハイ・ヒールをはいてるもんですから。あの人も、私の手をとってくれるんですけど、そのとき、あの人は少し前から貧血をおこしていて、ようやくおちついたところだったんです。私、これは悪いと思って、手をひっこめたわよ。だって、私の方が手をとってあげなくちゃならないところでしょ。だって私より二十五も年上でしょ、いいかあないけど」

どういふところで山上氏は立ちあがったのだろうか。この人妻の悲恋の物語は、彼は若いときに読んだ。それから彼は大人になって色々の経験をしてから読みなおした。

映画でも、たぶんあの場面があるはずだ。競馬場で美男騎兵将校のウロンスキイが落馬して怪我をすると、アンナはそばにいた夫のことを忘れて泣きだした。それを見ていた夫のカレーニンは、自分の身体でアンナをかくすようにしていたが、アンナの顔をじっと見ながら「奥さま気分

がお悪いようですからもうお帰りになった方がよいでしょう。さあ、御手をどうぞ」という。

「私は帰りませんの、どうぞ御先へ」とアンナは夫の方をふりかえりもしないでこたえる。こうして三度めにおなじことをくりかえしたあと、カレーニンはアンナを置き去りにして立ちあがる。そのあと、硬直したような、表情一つ動かさないカレーニンの顔や、ほとんど動かない上半身を、彼の脚が運んで行くところがあるだろう。そこで頑丈な、牡牛のような身体をもった醜男といわれているトルストイの筆によれば、カレーニンは、これは体面の問題だと思ふ。内面のことはとにかくとして体面のことは気をつける義務があるよ、お前は……。

絹子の話では、二人はそれよりもずっと前の場面で立ちあがった。ずうと、ずうと前でアンナとウーロンスキイの二人がはじめて知り合う頃から、もう山上は、気分が悪くなっていた。

「そういう意味では、あの人にはわるいけど、とてもつまらなかったの」

彼の妻がいった。

「うちの人も貧血というのは、この頃よくあるのよ。この前、霞が関ビルへ夜登って食事をしていたでしょ。私があるのハイ・ウェイはどこへ行くのかしら、ときくのに、この人ったら、反対の方を向いて、空返事をするじゃない？」

あのときくらい私、理解に苦しんだことなかったわ。真相が分るまでね。そのときこの人は一生懸命になって、ひとりで堪えていたらしかったのよ。でも大したことないといわれて安心したけど」

彼はいっしょに笑いだした。

「堪えていたのは、よかったね。あれは堪えて、努力すると、そのうち治まるらしいんです」

「きつとそれよ。一番いい理解者だわ、帰ったらそう申し伝えましょう」

と絹子がいった。

「私は何もしらないから夢中になってスクリーンの方を見てたわ。そしたら、外へ出てからあなたは、ずいぶんああいうのが好きのようだね、だって。だから私はいつたわ、わたし達、わたしに限らず、若い頃から熱読したわって」

「そう熱読したわね」

と妻がいうのがきこえた。

「このごろ、私って、いつも、『私に限らず』っていうことにしたのよ」

彼は山上に会ったことが一度もない。彼が思いうかべる山上は、寸分の隙もないように金目の紳士ふうな服装に身をかためた、おそろく少し面長の、ロマンス・グレイの大大まで歩く、瘦せ形の男にちがいない。彼は自分に敬意をもたれることに慣れていて、そのためにいくらかおこりっ

ぼくて、そして女には自分の方から大きなダイヤをあたえたりする。……網子の指に百万円のダイヤが光っている。あとになって妻が彼の目の前で誰かほかのものの向うてこういうだろう。

「彼女って例の大きなダイヤをつけていたわ。山上さんといっしょになるとき、あれをもらったんだけど、アパートにいたもんだから、留守に泥棒に入られたらどうしようと思って、なやんじゃったんだって。私、ダイヤなら、それや安くとも百万円以上はするものほしいけど、それや装飾品はほしいわよ。ほしくないどころか、ほしいわよ、私は好きよ。だけど、ひとの指に光っているのを見て、チラッ、チラッと眼を光らせて（ここで彼女は夫から少し顔をそむけるだろうと思う。こういうとき夫はたいてい笑っている。もし、きみがどこかで借金して三百万円のダイヤを買ってきても、ぼくは何も文句をいわずにきみの顔を見て、もちろん、ダイヤの方はあんまり見ないで、いや、なかなかいいねぐらいのことは口にするだろうが……その場合だって、そのダイヤをとくに見たくないのではなくて、たぶん彼には、指を捻げ、そらせて、「どう」といわれるのが、テレくさいのだろう、と思う。……そしてその金を返すために、いつもより精出して新しい内職をさがすか、それとも別のところで借金をしてきて、何とか埋合わせをするかもしれない。そのことで、彼はそのとき不平をいわ

ない以上、生涯不平をいわないでいるだろう。そうして、気にかけて、彼の妻が何かいうようなことがあれば、何でもないというし、もし万が一不平の言葉が口から思わず何かの拍子に出かかるとしても、しばらくして、あれは自分の本心ではない、と早速とり消すにちがいない。それは間違いないく、そうなのだ」旦那の較べっこをするのは、とてもいやだね。それがいやなのよ。だからこのごろは考えちゃってるのよ。……」

彼は山上が「アンナ・カレーニナ」を読んだら、どんなふうに思うか考える。山上にはアンナのようなことのある妻がいて、もう二十数年一度もあっていない。そういうことを、彼の妻は、網子からきいてよく知っているし、山上にも会ったことがある。二年前の夏のある日、彼の妻と山上と網子たちが軽井沢にあそんだとき、ある見晴しのいい奥まった部屋のある料理店で食事をしたあとと休んでいると、窓の外を見なれぬ男が行ったり来たりして、ときどきこの男女の一行の方を眺めた。そうすると山上は立ちあがって窓のところあたりにたはだかるようにして女たちをかくしたことがある。彼はこの話を妻からきいて山上のことを思いうかべているわけだ。そのとき、彼はほんのかすかだが山上に嫉妬心をおこした。なぜであろうか。山上カレーニンは彼より一まわり以上も年上だ。その彼が男として騎士の精神を発揮して、女たちをかくしたことそのことが、ど

ちらかというが無器用なしぐさなのに、なぜ嫉妬心をおこさせるのだらうか。その山上氏の腰つきや、バンドや、その高価な鼈甲のふちの眼鏡や、イタリア製のネクタイやカフス・ボタンや、イタリア製の靴下などや、そういう品物をすかして、身体や静脈のぐあいまで眼の前にうかんでくるようには、分らない。

「絹子さん、あれは別の日だった？」

と彼の妻が話しかけた。

「別の日よ、『アンナ・カレーニナ』を見た日じゃないわよ。あの日は、やっぱり気分が悪くて映画館のそばのお医者で注射をうってもらったんですもの。大へんだったのよ、『アンナ』は」

と絹子はいった。彼がそこにくる前に絹子が話していたことを、妻は彼にこう伝えた。

「駅を降りて、暗い道を二人で歩いてきたのね。そうしたら、あれですって、酔払いが寄ってきて、おい、といって彼女の方へつかみかかろうとしたんですって。それで、山上さんが、酔払いに向っていったのよ。それで眼のところなぐられて、眼鏡がこわれて眼のふちに怪我をなさったのよ。それで彼女が助けを求めたら、こんど彼女の方へ向ってきたんですって。だから彼女はもっていたコウモリ傘を、こうしてつつくような恰好で抵抗していた隙に、山上さんは赤電話で一一〇番を呼んだんですって。あくる日

会社へ男はあやまりにきたんですって。それがとってもおとなしい男で、眼鏡代三万六千円をもってきたそうよ」

「でもタマ代の六千円はまる損よ」

「通行人はいたのに誰も助けにきてくれないんですってよ、あなた」

「そういうタチの悪い酔っぱらいというのは、あとでケロツとしているもんなですよ。したことをおぼえちゃいないんですから、始末におえないんですね」

「私、山上が怪我したとき、あの方のことはハッキリさせとかなきゃあ、いけない、とあせったわ。そのあと、すぐ持ち出すのもわるいから、近いうちにもう一度たしかめておこうとは思ってるのよ」

「五十にもなったときのことを考えたら、女は心細いものよ。とくべつの人は別として、ちゃんとしておかなくっちゃ。うちなんかも、財産があるわけじゃないさあ」

彼はよく似た身の上の二人の女友達連中を眺めていた。彼の高校生の娘がそこに腰かけて話に耳をかたむけていた。彼の妻も、彼に釘をさしているな。遺言だけは早く弁護士に頼んで始末しておかなければならないが、まだ何もそのことには手をつけていなかった。

「絹子さんは、ね」と妻が彼の方を向いて話しかけた。

「絹子さんはね、自分が働いている分を全部これから貯金して、五十になるまでに千万円はためるんですって。その

千万円の分は、自分が楽しいことをして暮すための金ですって、そのほかにこの人の分は、二、三千万の分は確保してもらふようにするんですって」

「だって私、いつだって逃げ出さないとも限らないもの。

私に限らず、私の立場にあれば、自分の子供のでもない坊やのことで不和になれば、いつとび出さないともしたたものじゃないもの。私なんか今まで何一つこれはといって楽しいこととしてきたわけじゃなし、これからだって、それや話相手にはなるわよ、だけど、何といったって、奥さんが生きていて、山上の方が先きに亡くなるとなると、これからだって、それや私は坊やについては、十年間、私でない人が生んで育ててきたんだから、駄目なところがあっても、私の責任ではないというところはあるわよ。だけど、それが淋しいとこじゃない？」

「山上さんは、坊やとよりも、絹子さんと芝居を見たり、食事をしたりするのがいいんですってよ、あなた」

「そう」

と彼はいつて、絹子の方にうなずいた。

「千万円ためて、外国旅行でもなさるんですか」

絹子は緊張した用心ぶかい顔をした。この顔を見るときは山上のことを考えそうになった。

「それも計画の一つね」

「ほんとに羨ましいことだわ」

と彼の妻がいうのがきこえた。

世の中には、夫の前で羨ましがって見せない女もいるが、彼女はそう表現できない方の女だ、と彼は思った。

「絹子さんは、前アメリカへ行こうかと思ったことがあるんですって。だけどお母さんがいらっしやるでしょ」

「あの『重箱さん』が私のことはいいいよ、といったって、行けるもんじゃないわよ。わたしや、お前と別れて暮らしたていいわよ。その方がせいせいするっていうのよ。あたしには何でもいえるのね」

それまでそばでじいっと話をきいていた娘が席を立った。

七十四になるその老婆にも、彼は会ったことはなかった。山上の家で、四十になる娘と同じ寝室で寝ている老婆のアダ名が「重箱さん」。アダ名は誰がつけたのか知らん。女学生ふうのそのアダ名は、絹子が小学生の頃からひそかに頭の中に巣くっていて、女学校へ行くようになって、思いついたのだろう。彼は自分が若くて女学校の教師をしていた頃に、「アンコロ餅」だったか、「大福餅」だったか、「ボタ餅」だったか、アダ名をもらった。彼の妻の京子も、絹子も、女学校の教師をしていた頃の生徒の年齢である。眼の前にいる二人は、自分のことをこういう名で呼びたがっているように思えた。

上級生になって五人ばかり一緒にうつった写真では、み

んなセーラー服の上衣にモンペをはいてこちらを眺めている。

大きな肩をして、眼をむくようにして美しい眼を見はっているのが京子で、お月さまのように丸い顔をして、眼も口も同心円をえがくようなぐあいになり、コケシのようにおさまりかえりながら、こっちを見ているのが絹子である。

「アンコ餅さん、私を幸せにして下さいな。よう、私は幸せであるという保証がないと、がまんがならないんです」

あの頃よりも、成熟した女となった今の方が、そういういそうに見える。

このアダ名は、何を意味しているか、彼は時々考えてきたが、自分で「それはこういうことだ」とハッキリいつてきかせたことがないのじゃないかな。彼がそうする前に、手をあげて「さあ、もういいから、あっちへ行ってくれ」というものだから。

絹子はどのあたりか知らぬが、アメリカでうまれた。子供のとき母親や弟たちと日本へやってきて、母親に死なれた。彼女の親類である未亡人が、彼女たちの母親になった。そのとき父親はアメリカにいて、この新しい母親とは暮すことがなかった。そのうち戦争になり、向うで別の女と暮して父親は亡くなった。これが、彼の知っている絹子

の経歴である。その経歴を辿っていると、彼女が孤児になってトボトボと歩きつづけているように思える。

彼はこの夏、京子と娘とを連れて軽井沢の宿へ行き、そこが思ったより騒々しいので、京子たちの女学校の友達の子の別荘へ泊めてもらった。京子は、山上と絹子の泊るホテルをこの避暑地でさがしてやることになっていた。八月の初めだからこのホテルも予約で一杯で普通では空き部屋を提供してもらうことは難かしいことが分っていた。

この山上たちが昨年この避暑地へきたとき、男の子を連れてきた。恵子の別荘で、恵子の家族や京子たちが借りてきた猫みたいだった男の子の面倒を見ている間に、ホテルへ一泊した。

彼は微笑をうかべてその時の話をきいたことをおぼえている。軽井沢から京子が電話をかけてきて、今、山上さんにホテルで御馳走になっているの、とハズんだ声がきこえてきた。「あなたからも御礼をいっている、と伝えておきますよ」といった。

「ひとりで淋しい？」

と京子の電話の声はいった。

「そうね、淋しいのだらうね」

と彼は考えながらいった。彼女がそういう問いをかけてくることは分っていないながら、淋しいくせにその返事の用意がまったくなかった。

「きみは？」

彼はそういつてから、珍らしい自分のいい方におどろいた。

「淋しいといえば、娘だって淋しいだろう」

彼は娘のことを特に考えたり、妻以上に考えているわけではないが、忘れかかると、申訳ない気がしただけのことだ。一人立ちして恋人が出来て父親のことなど忘れてしまふようになれば、そのときにこちらも忘れても許されるだろう。それはこの娘の母親にすまないというようなことは、ほんとうは、かんけいのないことで、その気持を妻に伝えようとする、かえって誤解のもとになることは、分っていた。その点ではこれから何年暮したとしても、分りあえるという性質のものじゃない。分りあう必要もなければ、そのことを取り立てて気にするにも当らない。

京子が一日かかって探した日本式の宿へ案内されたが、山上カレーニンは昔名のある人の別荘だったその古い建物の広い畳を敷いた便所のついたとつもなく広い部屋が気に入くわなないといつてそこをキャンセルして、それから自分でうまく見つけたホテルへ泊った。今年は山上は子供と絹子連れて草津へ行く予定になっていた。ところが急に中学生の息子は学校から旅行に行くことになった。山上は不意にこの機会に絹子と二人だけでまた軽井沢のホテルに泊りたいと思ひ立った。

この話をきいたとき、彼は微笑した。ホテルへ二人きりで泊りたいと思つているこの老人と若い妻は、少し二人の中へ入りこんで考えると、彼の想像のいくつかの箱の中の、隅の方にある一つに当てはまるようなものに思われる。やがて十年たてば、彼の上にもめぐってくる世界であるが……

彼は恵子の別荘でぼんやりしている間に、京子は恵子と今年も、もう手おくれと知りながら半日かけて車でホテルをきいてまわったが、どこも相手にしてくれなかった。二人がフロントで話しかけるのが、部屋のことらしいと分ると、もう横を向いて返事もしない。

そのあげく、恵子のこの避暑地での女友達に頼み、収獲なしでもどつてきた。受付けでブンと横を向かれた口惜しさを二人が大きな声でくりかえしているのを、彼はきくともなくきいていた。

その夕刻その女友達から電話があった。「ああ、よかったわ。ほんとにすみませんでした」と、こたえる恵子の声が奥の部屋まできこえた。恵子京子の二人は、そのことでよかったわ、よかったわといつているのが、ホテルが見つかったということであった。女友達の主人の顔で支配人に話をつけ、特別に保留してある部屋をまわしてくれたと分った。

「そういう部屋がとつてあるのよ。そうしたもののよ、きつ

と。だから、私たちが行ったって問題にしてくれないのよ。やっぱり道のあるところ歩かなくっちゃ駄目なのよ」

「そうよ、私たちはそのあたりのタンポか沼へ落っこっちゃう口なのよ」

と京子が合槌を打った。誰にも京子は合槌を打つが、夫の自分には時々やりこめてくる、と彼は思った。自分が出かけて行けば、それこそ沼へおちたところだ、少々京子がやりこめてきたところで、彼はそしらぬ顔をしている。その代り、いつかまとめて彼の方で一言で何かタトエ話にして、ぐさっとやらないとも限らない。今日のこと、彼は何とも思っているところではない。面白い話としてきいているが、五年先には、一つの材料となって姿を変えてあらわれてこないとも限らない。

その夜、恵子は東京の絹子のところへ電話をかけた。そのとき彼はトイレに入っていたので、はしぎ屋の恵子の声が尻すぼみになってくるのを否応なしに、耳にした。

恵子は京子の枕もとへやってきて、小さい声だが、怒りを押えた調子でいった。そのとき彼はキチンで外を見ていた。落雷のあと、まだ電気が消えたまま、落葉樹の葉のシズクが月の光をうけて光っているのを見ていた。

「あなたも別荘建てなさいよ」と恵子が京子にいていたのを考えていた。

「どうですか、あなた」

友達の前で、大胆に京子はいった。

「さあ、どうですかねえ」

と彼はこたえた。

軽井沢から帰ってくる途中、車の中で京子は夫にいった。「山上は自分の会社の社長を通してホテルを特別に世話してもらったから、あなたの方を断わってちょうだい、と、絹子さんがいうのよ」

「それは、どっちを断わっても、ぐあいがわるいなあ。そういうときには本当なら絹子さんは、山上さんの方を断わるどころだろうな」

「あなたなら私にそうして貰いたい？」

京子は考えながらいった。

「たぶんね」と彼は警戒しながらこたえた。「しかし即座に、そっちの方を断わってくれというのは、おもしろいね」

そういつているうちに夫は少しきつい口調になった。もうそのことに妻が気がついてることが分ったな、と思った、やっぱりそうだった。彼女はいった。「山上さんが愛してくれてるのを、彼女分っているからなのよ」

「そうだね」

と彼はいった。しかし彼は考えていた。

「それで、山上さんは、そのこと、つまりこちらをキャンセルすることを知っているのだろうか。もし知ったとした場合、やっぱり、そっちを断わってくれ、ということだろうか。ということは、そのとき、少しは恵子やお前の奔走のことを考えて、悪いと思うが、しかし自分の方も大いに困るので、申訳ないけれどもキャンセルお願いします、ということだろうか。そうなら、山上さんが自分で直接そのことをわびてくるか、または絹子さんにわびさせるかどちらかをするべきではないか。そうでなければ、山上氏も絹子さんも両方ともおかしいのじゃないかな」

と彼は自分のことのように考えつづけた。そして、

「そんなにしてまで二人は、軽井沢へ行かなければならぬのかね」

とついついとき、彼はおやおや、これはこんなことを言い出してあとが困るなあ、と思った。

すぐ京子は追求してきた。

「どういう意味ですか」

「東京のホテルでもいいんじゃないのかな。ただの一晚じゃないか」

「でも、ただの一晚だからこそ、そうなのよ」

そこからあとは彼は目立たぬように黙ると、外を見た。

彼の声はこう呟いた。

「いや、ぼくのいうのはね、ハタから見ると、こういうことは見てもいいことではないということだ」

「私たちが見てもないというんなら、そんなの、私、いやあよ」

京子の声は、このときとばかり、そうはねかえってきそうに思えた。

東京にもどってからしばらくして、恵子から京子に電話がかかってきた。ああ、電話がかかってきたな、と彼は別の部屋にいて、思った。

「どうしても腹が立って仕方がないのよう。私やあなたが、あんなにして人に頼んでせつかく探してあげたのに、あとで金をお払いますから、いだけ払ってキャンセルして下さいって、いうのは、ちょっと馬鹿にしてない？

金を払えばいいというもんじゃないわよ。もう沢山よ、あの人達の世話をするのは、といたくなるわよ。あなたにも頼み先の家にも申し訳ないわよ。だから私、先日半日留守番をしてケーキをこさえてやったりして、サービスしたのよ」

京子はいった。

「お前は何とも思っていないんだらう」

「そうよ。それではないけない？」

「そんなことないさ。恵子さんだって、口でいうほどには

思っていないんだ」

彼にしても、山上夫妻のことは、大して気にかけているわけではなかった。

「それで、山上夫妻はホテルへ泊ったあと、どうするのかね」

「山上さんが帰京して、入れ違いに坊やがやってきて、恵子さんとこで過すのよ」

「それでまた恵子さんの息子さんに遊んでもらうのか」

「あそこで遊んでもらわなきゃ、友達というものが、ないんだから」

「うちの子がよくなったように、あそこだって、もう遊び相手をあてがってやるようなことは、いらないんじゃないのか」

「大分よくなったでしょうよ。でも綱子さんに見たら、たえず不安なのよ」

と京子はいった。それから、

「あなたがいったように、恵子さんには、あなたがほんとうに楽しかったといっている、と伝えておいたわ。恵子さん、とっても喜んでいましたようよ。あなたの旦那さんにも、くれぐれもうちから宜しくって、といったら、嬉しそうに笑ってたわ。われわれ夫婦も、だんだんウソをつくようになったと思つて、とてもヘンなかんじよ」

といった。

「ウソというわけではないさ。どこの家でもそれを礼儀と
思っているのだから。ぼくはいい気になって親切に甘えて
いたような気がしたのだ。いい気になっていて、気がつか
ないというのは恐しいからね」

「いづれにしても、私はあなたの家風に染ってきたのね」
と京子は笑った。

彼は、われわれ夫婦というときに、京子が最初は少し気
がねをしていたことを思い浮かべた。彼は京子はいやがる
かもしれないが、前の妻と今度の妻とは、同じものだ、と
ひそかに思いはじめていた。夢の中で重なるのが、一番正
直なあらわれだ、と思った。そう思うと、何かと彼として
は具合がよかったが、一応は京子には知らぬ顔をしていな
ければならなかった。もっとも京子の方が自分の方から、
さきに一心同体(?)になろうとしている気配があった。
彼女が着ているガウンは彼の前の妻のものを仕立直したも
ののだから。

「こんなにダブダブよ」

と彼に両手をヒラヒラさせて京子はいった。

「ずいぶん肥ってらしたのね」

「最後のころはね」

そういうとき、彼は娘がそばにいないことを願った。は
るかに彼よりきびしい眼をはなつきまっているからだ。

「わたし可愛く見えて？」

彼はこたえようがないことを知っていて、そう問いかけ
てくる京子を見て、ほんとうに可愛いかどうか、しらべて
見るようにじっと見ている不器用な自分にあきれた。

彼はよくあとで、ハデな、「わたし可愛く見えて？」と
いうようなことを、前の妻は全然いわなかったか、どう
か、考えることがあった。ふいにおちこむように、食事の
最中とか、妻を愛撫しているときに考えることがあって、
困った。もう考えなければならなかった。

おかしいものだ。前の妻と思えば、そういう気がしてな
らないのだ。その情景さうかんできそうだが、それを彼
はそれ以上追求しないことにしていた。しかし、そういう映
像が恨みがましくつもりにつもって行くようにも思える。

「可愛く見えて？」

とは一度もいわなかったとしても、それとおなじような
ことを何度もいつづけてきたのだろうか。いや、彼女の
全生活はそれをいつづけていたのに、こっちはうっかり
していたのかもしれない。

ある日京子は、前の妻とよく似た表情をして、睨むマネ
をしたことがあった。おこりつぽかった前の妻のことを、
娘からきいていた京子は、写真をひきずり出してひそかに
見たらしく、そっくりの表情をした。そのとき彼は、前の
妻が人のマネが好きで、この京子を知っていたら、そして
この家にこうして彼や娘らと一緒に住んでいるのを見つ

たら、皮肉っぽく、京子のマネを巧みにやって見せ、

「可愛く見えて？」

などと、シナを作って見せるかも知れないと思ったりした。京子にとって、それが一番いたいところにながいなし、それを眺めている彼も第三者から見たら、どやしつけてやりたく見えるはずだったから。

しかし自分が死んでいても同じことだ。自分が死んでいたら、出来ることなら、別の男をもって、それはそれなりに苦勞をし、その新しい男といっしょに暮すうちに、この自分のことは忘れてしまうなら、それもどんなに面白いことだろう、と思う。そうは簡単に行くまい。子供の眼というものが、前の夫のことを思いださせるかもしれない。そうでなくとも、自分に対する一種の肌恋しさといったものは、ヘンなぐあいに忍びよってくるものだろうから……。

すると京子はニヤニヤ笑っている彼に、

「あなたって方は不潔よ、何といってもちょっと不潔だよ」

とささやくようにいった。彼女は身をひるがえしてキッチンへ入ってしまうが、その、ささやき方からすると、

「しかし、そういつてしまえば、損をするのは、こっちなんだからな。まあ、私は黙っていてあげるわよ」

というつもりだと思う。それから思案するようにして、

「しかし、私の口からいっては何だけど、あなたは一番分

がいいなあ」

といっているように見える。料理の本を見ながら、

「私の方がいいと思っている人があるかもしれないから、そうじゃないって、世間さまに宣伝しなきゃあね」と。

彼の前で京子が綱子にしているのが、きこえた。

「あなたが『重箱』さんのことをそうして口に出来るのは、あなたと『重箱』さんとの間が、とっても、うまく行っているしょうこのよ。あなたを産んだ親でもないし、あなたのパパとも実質的には何も結ばれていなかったのに、あなたを育ててきたというのは、ほんとうに美談よ」

「それはそうよ。そりゃ、たいへんなことよ。その点、私たちなんか遠く及ばないわよ」

そう切口上でいうときの綱子がひきつったように、口をゆがめる瞬間は、この美しい女の中でたった一つ美しくないときだ、と彼は思った。

この顔つきについて山上が文句をいたくなるときが、もう来ているのかもしれないが、それを黙っているにちがいない。

「その遠く及ばないのが、山上のところへ二人でやってくるようになるときから、そろそろうるさくなってきたわ